

届け人、

届け人、

れら

見たいものを見ることができない泉。その前では誰もが平等だという。まるで陳腐な神に祈るが如くモノ想えば、願わん場所が現れるという――。

身体の奥底に響くかの如くに叫び狂う泉が濃い霧に包まれていく。

永遠に続くかのように思われた霧が晴れると、レンガ積みの外壁を持つ建物が現れた。所々に露出している骨組み部分は褐色になり、レンガは欠けている。絡みつく蔦の碧と、纏わりつく風化による傷み。見るからに古びたその姿。しかし、慄然としてそこに留まり続ける様子は、まるで年月がそれに威厳と強さを与えたようであった。

蔦の絡まった重い扉をぬけると、落ち着いた光が室内に広がっていた。窓から入ってくる暖かな陽を受けて、

部屋全体が春の陽気に踊っている。

部屋の奥から流れてくるのは柔らかい音色。それを奏でているのは螺旋巻き式の蓄音機であった。巻いているものの姿がないにもかかわらず、ゆるやかに音が奏でられる。軋みを上げそうな外見とは裏腹に滑らかに音楽を流していく。

室内の壁には様々な絵が飾ってある。淡い人魚の絵や天使の絵、紅葉した山々の絵。扉から一番遠くの壁に、他の絵と比較してかなり大きな絵が飾ってある。その絵の中では、様々な色が混ざり合っている。他の絵のような風景や人物などが描かれているわけではない。ただただ様々な色が軽やかに優雅に、それでいて逞しく踊っているのである。

「よろしいのですか」

暖かい部屋に、ボーイソプラノが響いた。古めかしくもよく手入れがされているカウンターの奥に、一人の少年が立っている。目鼻の整った顔やカウンターの上面に載せられた手は透き通るような白さである。窓から差し込む陽に照らされた髪は煌くキヤメル。その煌き越しに同様のキヤメルで輝く瞳。全体の淡さと対照的に映る鮮やかで、紅い唇。

声を発した少年の整った顔には微笑みがのせられている。しかし、よく見れば、細い眉が僅かに中央へと寄せられている。彼の瞳のキヤメルは、濃さを増した。

にやつ、とカウンターの下の方から声がした。
漆黒を纏った小さな塊。それが、少年の声に反応して
いるように鳴いた。

少年はふつと息を吐いた。

「そうですね、」

それが何を言ったのかはわからない。しかし、少年に
は何事かが理解できたようだ。

「確かに、誰もがそれを望んでいるのでしたね」

だが、他の者が会話の内容を推測するには、少年の言
葉だけでは足りない。

「承りました」

彼の鮮やかに紅い唇は漸く本来の笑みを灯した。

しばしの沈黙の後、漆黒の塊が動いた。少年へ背を向
け、扉の方へと。

動くたびに漆黒の毛が伴に揺れる。細く開かれた金色
の双眸は、暗夜の海に浮かぶ月の陽炎のようである。優
雅に歩くその姿は、双眸からの印象が掴みどころがなく
感じさせる。

途中、それは少年を振り返った。

「なにかお忘れ物が、」

見送るように、漆黒の後ろ姿を眺めていた少年が尋ね
た。

「あ、と一声鳴いた。

少年は何も問わずに、古めかしいカウンターから出て

きた。そつと腰をかがめて、その首から何かをはずし
た。

「ありがとうございます」

彼がはずしたものは、少し色褪せた赤い首輪。それを
胸元に寄せ、それに対して少年は春のような微笑を湛え
た。

彼の言葉に満足したのか、それはその後彼には一瞥も
くれずに部屋から消えていった。まるで、そこには始め
から誰もいなかったかのように何も——気配さえも遺し
てはいかない。

そして、辺りは淡い紅色をした霧、いや花卉に包まれ
ていく。すべてが呑み込まれていく。

淡い色をした花卉が消え去ってしまうと、そこは暗い
空間だった。周りに何があるのか、どのくらい広いのか、
それを見極めるのは難しいような場所だった。

此処は、音が反響している。そのことから、洞窟のよ
うな場所だと推測できた。

だが、この音色を耳にすると、そんな推測など馬鹿ら

しくなる。洞窟中に、心の奥底に、苦しいほど響いてくる。数多のものを投げ出して、発狂してしまうかの如く、聴く者が痛いと感じるような、そのような音色。

今までの温かい雰囲気とは、一転して寒々しいようなじめじめしたような印象を持つ。そのイメージは、先ほどから心の奥底に響いてくる音のせいなのかもしれない。哀しみが、苦しみが、切なさが、痛みを伴って心身を蝕みはじめる。この痛みに永遠に苛まれるくらいならば――。

「あなたが、ボクをお呼びになったのですか」

反響する音の中で、暖かいボーイソプラノが流れた。

すべてを包み込む暖かさ。身を蝕む痛みが、少年の存在で和らいでいく。

暗い重い空間の中で、少年の姿が浮かび上がってくるかのように見えた。陽の光が届かないような場所であるにも関わらず、少年はそれを浴びているかのように暖かな白を身に纏っていた。少年自身が陽光であるかのように。

身に響く痛みを打ち消すように、静かに暖める彼の声色。そして、優しげな色を帯びた瞳。

硬直してしまいそうな精神が、正常に動き出すと彼の問いかけが気になった。

少年の視線を辿ると、少し盛り上がった岩の上に紅い髪の少女が一人。泣き腫らしたように晴が紅くなっている。

た。ほんのりと朱が差した頬は煌いている。しかし、彼女の表情は微笑んでいるようにしか見えないものである。彼女の全体は少年と同じように白い。下半身はウオの如くに、暗い洞窟内で輝いていた。

「ボクは、届かぬ想いを繋ぐものです」

ふわりとした微笑みで少年は言った。

この言葉に呼応して、空間に響いていた音色が変わった。

「ええ、大丈夫。ボクが必ずお届けいたします」

淋しくて痛々しいものから、淋しくとも柔らかいものへ。

紅い髪の少女は、ずっと笑みを浮かべたままである。しかし、音色の変化は少女の表情が変わったかのような印象を与える。音の印象と同じように、苦しそうなものから、嬉しそうなものに。

その変化を少女に与えた少年も、僅かに紅い唇に笑みを灯したようだった。

少年たちが夜半の海へと呑み込まれていく。そこで、再び視界はフェードアウトしていく。

また、明るい場所に降り立った。ただし、前の場所と違って周りが色で賑わっている。

秋の様相に衣替えを始めた木々のある場所。赤や黄色づき始めた葉を纏って、冬支度を始めている。

その中で、一本だけ異彩を放つものがあった。橙の衣を着た木だ。異彩だという原因は、単に大木であるせいだけではないようだ。

よく見ると、それは木の葉ではなく小さな橙色の花の衣だった。他の木々が、葉の色づきによって化粧をしている中で。

「ねえ、おにいちゃんはだあれ。どうしてここにいるの」
橙の木の根元に、小さな女の子がいた。飛び跳ねるようにしながら、少年に近づいて話しかける。少し巻髪がかった栗色の長い髪が、彼女の動きに合わせて踊っている。

少年に対して、興味を持ったらしく大きな目がキラキラと輝いている。

「ボクは、届け人。金木犀の香りと想いに誘われてきたんです」

冬の——雪の訪れのような少年は、色づく世界の中で際立っていた。けれど、彼の鮮やかな紅い唇だけはその世界の色に染まったように見える。

「あなたも、伝えたい想いがありますか」

女の子の髪と同じ栗色の瞳を覗き込むような形で、少年は尋ねた。

「おにいちゃんは、ぼくのおもいを届けてくれるの」
大きな栗色の瞳を、それ以上開けないと言わんばかりに開いて少年の顔を見上げている。

「ええ、あなたの願うままに」

「ほんとー、ほんとー」

女の子の驚きの詰まった表情が、一瞬のうちに満面の笑みへと移り変わった。

「あえるんだ、やったーやったー、と彼女は少年の周りを回りながら飛び跳ねている。」

温かい色に染まる世界の中で、栗色の髪の女の子は笑顔で駆け回る。その様子を、白い少年がそつと見守っている。

「これで本当に、やつと、あえるんだね。ぼく——」

唐突に、女の子がびたりと止まった。

「ずうっとヒトリなんていやだもん」

俯いてポツリと漏らす彼女の手は力強くスカート裾を握り締めている。先ほどまでの子供らしい無邪気な笑顔は、消え去っていた。

「そうですね、誰だって独りは嫌なものです」

少年は、自分の胸ほどもない女の子の頭をなでた。しかし、彼の瞳は女の子に向けられてはいない。

届け人、

「……うん、」

女の子は、どうにか聞き取れる声で頷いた。

「どんなものにも、永久なんてないのですから」

少年は誰にもなく呟いているようだった。

暖かい色が小さな二人を包んでいる。だが、その色たちは彼らの心まで暖めることができるのだろうか。むしろ、対照的ときえ言えるようで、色鮮やかな世界は二人を取り残している。

切り取られた形だけの世界の中に。

そこで、彼らの世界は色鮮やかな葉に呑み込まれていく。

そして、そこは一度見たことのある少年の職場だった。作りの古い建物。その古さの分だけ温かみをもった彼の部屋。

前と違うのは、部屋を包む音色と奥に掛っている絵。

それと、カウンターの前——少年の前にいるのが一人の少女だということ。

「ここは、想いを届けてくれるお店って本当ですか」

肩くらいまでの髪の少女が言った。

「はい、此処は相手に届くことのなかった想いを繋ぐための場所です」

いつもの穏やかな笑みを浮かべて、少年は少女の問いに答えた。

「よかった、それじゃあ、私の思いをおねいちゃんに届けてくれませんか」

「はい、承りました」

少女は、了承の言葉を聞くとほっとしたようだった。

彼女の肩の荷が下りたことが後ろ姿からも窺えた。

「ありがとう、黒猫さんの言ってた通りだね」

緊張が消えたためか、少女の言葉は本来の年相応の口調に近づいたようであった。

「え、」

突然の感謝に、少年は初めて微笑みを崩した。

「白い雪みたいなお兄さんは、雪と違ってみんなを暖かく包んでくれるって」

「それは……」

「ありがとうっ」

少年の言葉を遮って、少女は再び感謝を告げた。相手の動揺など、気にする素振りも見せない。言い切るような礼の言葉。

「はいはい。雪の、届け人のお兄さん」

少女は、少年が想いを言葉にするのを待つこともなく、

去っていった。困惑の表情をした少年を遺して。

少年は、少女が去ってからどのくらい静止していたのだろうか。それは、一瞬とも、一時間とも、一年とも、一億年ともいえるかもしれない。

「——ありがとうございます」

漸く彼は、少女がいた形跡も温もりもなくなった場所に向かつて言った。それは——彼のその言葉は、少女に対するものなのか、何を意味するものなのかわからないが少年は確かにそう呟いた。

誰もいない空間に向かつて。そつと。いったいその言葉にどんな想いが込められているのだろうか。

「いいえ、誰もいないわけではありませんよ」

そう言った少年の顔からは、いつのまにか困惑は消えていた。それがあつた場所には、知らぬ間に穏やかな笑みに戻っていた。

誰もいないわけではない、少年はそう言うが現にその空間には少年以外誰もいない。ただひとりだけ、たった一人分だけの言葉が室内に零れ落ちてくる。

暖かな空気を失っていない彼の仕事部屋。螺旋巻き式の蓄音器の静かだが、懐かしい音色が彼を包み込んでいく。優しく舞い落ちるような音色に包まれている中で、身体の奥にはボーイソプラノだけが響いてくる。

「ええ、此処の、この場所に響いているのはボクの声だけ。でも、」

彼の瞳のキヤメルが色を増した。

まるで獲物を見つけた狩人のように。その捕らえられたモノはなんであつても逃れることなどできはしない。

彼が捕らえているのは誰。

「そうです、あなたがそこでボクを見ていらつしやるじやありませんか」

少年の瞳のキヤメルの色が深く濃くなっていく。

見ている。

鮮やかな彼の紅い唇は、滑らかに動く。

「あなたがそこにいて」

彼のボーイソプラノがすべての音をも支配していく。

見ているのは、彼か。

蓄音機の音色が消えてボーイソプラノだけが響いている。た。

「見ている限り、」

ゆつくりと、少年は唇の端を上げていく。

それとも、私か——。

届け人、

少年の顔には、穏やかな笑みがある。

「ボクは、」

彼の笑みは、すべてを見透かしたようである。

確かに泉を通して少年を見ている。

だが、何故彼は知っているのだろうか。

泉には、少年しか映っていない。

「決して一人じゃない」

私の視界も少年しか映していない。

彼は、孤独じゃない。

頭の中で、心の奥で、言葉が交差する。

「そうです。ボクは孤独でもありません」

聞こえているはずもないモノに対して、彼は応じる。

こどく、コドク、孤独。

ならば、孤独に苛まれているのは私だけ――。

「孤独という言葉が妙に反芻された。」

「大丈夫、あなただっぴ一人じゃありません」

はたから見れば、少年は独り言を呟いているかの如く

に見える。

本当に、私はヒトリじゃないのか。

少年の顔が徐々に霧で霞んでいく。

「いつの日かあなたの所にも想いが届きます」

霞んで、歪んで消えていく中で、彼は言葉を紡ぐ。

私の処に、だって。

それは、いったい誰から――。

私と彼の問答は噛み合わないまま。

「いつの日か、」

少年は、紅く色づいた唇を開いたようであった。

いつの日か。

白い霧の中でも、紅い唇はその存在を失わない。

「必ず」

その口元に、そっと笑みを灯したように思えた。

ああ、そうなのだろうか。

私に思いを馳せているものがいるのだろうか。

より深くなっていく霧。

「いますとも」

「紅い色さえも見つけることはできない。

いる、のか。

少年の姿は、霧に呑まれた。

「あなたは、その想いをいつか届けさせるために——」

泉からは見えなくなった少年の声が響いてくる。

届けさせるために——。

私が。

泉は、すでに霧以外を映しはしない。

「もうずいぶんと昔の話ですね」

白い霧しか映さない泉に力なく、近寄った。

ムカシ、私と少年は——。

もう何も映さない泉に、何を期待したというのだろうか。しかし、最後に少年のボーイソプラノが耳に届いた。

「いつかあなたの許へ届けにゆきます。神様」

見たいものを見ることができない泉。その前では誰もが平等だという。まるで陳腐な神に祈るが如くモノ想えば、願わん場所が現れるという——。

そう、それは神さえも同じこと。想いは誰しもが相手と自分のために願うこと。

たとえ、決して赦されないことだとしても。

すべてを捨てても、想いさえあれば——。